慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	E・ H・ ノーマン著 大窪愿二訳 日本における近代国家の成立
Sub Title	
Author	金丸, 平八
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.3 (1948. 3) ,p.162(56)- 165(59)
JaLC DOI	10.14991/001.19480301-0056
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19480301-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

E・H・ノーマン著・大窪愿二譯

「日本に於ける近代國家の成立」

金丸平八

一

言論の壓迫から解放された我國の學界が幾多の新しい著作を送り出してゐる裡に、本書は異色ある存在として同學の人々から注目を以て迎へられた。本書の成立した一九四〇年の我が國には學問の自由があつたかと今更ながら當時の狀態を振返る時、我々は本書に對して限りなき羨望と尊敬の念を拂はざるを得ない。しかも著者は語學上の障害を殆ど完全に克服し、幾多の著作を理解し、老大な資料に忠實に依據しつゝ本書を書き上げられたのである。眞摯なる努力に對しては何人と雖も絕讚の辭を惜しまないであらう。

本書はその副題に示せる如く「明治時代の政治經濟問題」の分析を試みたものである。此の副題は、一九二七年から一九三七年の約十年間に亘つて行はれた資本主義論爭を想起せしめる。それは直接的には日本プロレタリアートの戰略戰術の問題を契機として惹起せしめられたものではあつたが、同時に日本の近代的・資本主義的國家への移行が複雜多岐なる過程の裡に行はれたことを示すものでもあつた。それ故、著者が率直に語られるが如く、「本書を讀んで解答を得た疑問よりも、新に生じた疑問の多いことがわかつたとしても、失望すべき筋合のものでは全くないのであつて」（譯書四頁。以下同斷）事實幾多解明さるべき疑問が我々の前に橫つてゐるのである。

本書の意圖は、冒頭の序文に記すが如く、「明治變革の特質のうち、現代日本の經濟、政治ならびに外交政策を大きく規定したところのものを選び出して、これを分析し、ついでその變革過程を、封建制度の終末から十九世紀末に新憲法が制定されて國家權力が確立するまでにわたつて、論述せんとするにある。」（四一頁）そして「全篇を一貫する中心題目は、明治維新後における中央集權的・絕對主義的國家の急速な創始と、國家保護統制を條件とする工業的經濟の發達とを、解明することである。」（四一頁）かゝる課題の解明に當り、その力點は一には「封建日本から近代日本への移行の速度と形態、他は維新を達成した指導者たちの社會的性格」究明の上に置かれる。（四六頁。傍點ハ筆者）以下この基本的ラインを追ひつゝ若干の紹介を試みよう。

二

封建社會の經濟的基礎が貨幣經濟の渦中で崩壞し始めたとき、各階級は擧つて反封建制＝反幕府政治鬪爭の烽を揚げた。幕末期に蔓延した百姓一揆も、封建制度の支配力を弱め、從つて倒幕政治運動の勝利を大いに可能ならしめはしたのであつたが（五九頁）、その力は「反封建運動の背後の原動力に」止つた。（一一一頁。傍點筆者）一方高利貸的商業資本の蓄積により富强化し、既に封建的經濟組織を桎梏と感じてゐた商人階級も、一八六八年當時にあつてすら政府に對する地位は、前ジャコバン期フランスのそれより劣弱のものであつた。（四六頁）それ故に「彼等の反幕鬪爭における役割は從屬的なものに止つた。」（五六頁）かくて反幕政治鬪爭における指導力は、殘された階級即ち武士の手に握られた。彼等――特に下級武士――は經濟的困窮にも拘らず、反抗的な農民よりは支配階級の方にも一層の親近感をもつてゐた。（一一六頁）かゝる武士は百姓一揆の先頭に立つと同時に、「外國貿易に對する封建的諸制限に拘束され、破產せる幕府の逃げ道としての御用金に苦しめられてゐた大商人」（六五頁）と「養子緣組または侍株の買受けを通じて、更には「封建的支配者が、主として軍事的目的のために資本家的生產方法の採用する」に從ひ「しばしば町家に庇護を求めたこ」（一一〇頁）とを通じて妥結し、反幕政治鬪爭へと驅りたてた。從つて明治維新は「薩摩、長州、土佐、肥前の下級武士および浪人と少數の公卿を指導者とし、京・大阪の豪商の財力を後楯とする反德川諸勢力の團結によつて達成された。」（九六頁）のであつた。然し乍ら前記の國內狀勢に加ふるに、「西洋列强の壓力は、此等の人々をして、新政府に、「自由主義的な制度といふやうな贅澤品に時間をかける」ことを許さなかつた。（八七頁）全ては急速に仕上げられねばならない。かゝる速度は日本を中國化する危險から脫せしめはしたが、同時に新政府の上に拭ひ難い烙印を押した。正に「その速度のゆえに、これらの重大な變革は、民主々義的代議制度を通じ人民大衆の手によつてではなく、少數の專制官僚によつて達成されたのである。」（八七頁）從つて明治維新は、著者にとつてブルジョア民主々義革命の幻影すら止めてゐるものではない。新政府が益々明かにしたものは、專制的絕對主義國家としての性格であつた。かゝる新政府の性格は、「下からの要求に對しては斷乎反對の立場をとり」「警察制度と軍事力を隨時に行使し得る中央集權的政府をぜひとも必要とした。」（四七頁）然し乍ら明治政府の絕對主義的性格は、之等のことを通じて反動的役割を果したが故に規定されるものではない。

然らば著者は絕對主義を如何に理解するのであらうか。著者の理解は「絕對王政なるものは、かの舊封建門閥は沒落し、中世紀的市民階級が近代ブルジョア階級に成長し、しかもなほ此の鬪爭に於ける一方が他方を克服し得てゐないといふ過度期に現はれる」（マルクス）。そして「それはたゞ社會生活中に權威をもつところの個々の階級が相互に均衡して居り、ためにいづ

れの一方も國家權力を奪取するに足る力を有してゐない場合にのみ形成される」（カウツキー）といふ所謂均衡理論の上に構成せられてゐる。決して明治政府の反動的な歴史的役割より結論されたものでなく、逆に其等の役割は明治政府の絶對主義的性格よりする當然の歸結であつた。だから明治政府を、著者が「中央集權的・絶對主義國家」と規程してゐることは注意されねばならぬ。明治政府の絶對主義的側面は、倒幕政治運動において從屬的役割に甘んじた商人階級の權力が「新政府の安定を達成するうへにより深甚な影響を及した」（九六頁）理由を解明し、更には地租改正を不徹底な——むしろ封建的貢租の金納化乃至は全國的規模における統一化——土地改革に墮せしめ、プロレタリアートの生成過程とした原因も、新政府のかゝる側面の正確な理解に基いて正しく評價し得るであらう。同時に秩祿處分に現はれた「舊封建領主との妥協」商業・金融貴族との封建・土地貴族との調印式」（一四九頁）も、正にかゝる觀點よりしてのみ明確に把握し得るのである。

然し乍ら明治政府がイギリス乃至フランス更にはプロシヤのそれに比較して單純に絶對主義的段階と規定し得ない所以は、明治政府の構造そのものの裡に存在した。即ち明治政府の絶對主義を支へる社會的・物質的基盤の相異がそれである。物質的基礎が農奴的生活の下に喘ぐ農民よりの直接的收取關係にあることを指摘した著者が、「維新は農民の土地所有者としての解放をもたらしはしたが、耕作者として必要な眞の解放はもたらさなかつた」（一九九頁）といふ前提の下に、「明治初年の過度期においては、農民は單に封建制度の若干の最も典型的な束縛からも解放されなかつた」（一二六頁）としてゐることは注目に價する。このことは著者が租税の收取關係における封建的束縛の殘存を意味せしめてゐることには疑がない。（一二六頁）從つてそこでは、封建的土地所有の解體から生じた自營農民、手工業者、小市民が、その支柱となり得たのである。こゝにいふ自營農民は、その所有權は如何なる封建的看板によつて蔽はれてゐたにせよ、自由な——封建的土地所有から解放された——自營農民なのである。

然し之等の諸階級の勢力は、新政府の絶對主義的側面に加へられた速度の故に、人民大衆による農民運動や都市プロレタリアートの下からの反逆を壓して、漸次、大商人、地主、官僚との結合に拍身をかける結果となつた。それ故に明治絶對主義國家は、一面において重商主義政策の採用により資本主義化の途を辿りつゝも、産業資本の胎頭を示すことなく、大商人＝財閥との連繋により一擧に金融資本乃至は銀行資本と結合せしめる結果を招來した。（一七〇頁）と同時に、反面、かゝる歪曲せられたる特殊な結合形態は、軍事的、官僚的、專制的國家への形態轉化の色彩を著しく濃厚ならしめた。それは自由黨の變質過程に、更には之に對する政府の攻擊、分離政策の中に、看取され

る所である。そしてかゝる理由によつて日本に於けるブルジョア革命を抑壓し、工業化の過程が軍事産業を先頭とする顚倒せる發展段階を生み出し（一八八頁）又日本における封建制的遺制を驚く程長期間に亘つて維持せしめたのであつた。著者の指摘する「明治日本は現代日本のうちにあとをとどめてゐるばかりか、むしろ隆々たる勢をすら示してゐる」（四一頁）といふことは、明治初期の農業に於ける生産關係——それは日本に於ける社會的基礎である——を現代まで存續せしめたことを意味するものである。換言すれば一九四〇年まで我國は、基本的には、かゝる絶對主義段階に置かれたことを意味するのであらう。然しこのことは、前述せる絶對主義の社會的基礎の變質過程を理解することによつて、揚棄せしめられるものと考へる。だから本書の第三章「明治維新」は、明治初期の絶對主義國家の社會的支柱茲にこれの變質過程分析に捧げられてゐるものと解すべきである。

三

著書の第二の力點「明治維新の指導者達の社會的性格に關しては、同じ著者の「日本における兵士と農民」（白日書院）を併讀することにより一層明瞭に把握されるであらう。これに關しては著者が「日本版の序にかへて」と題して特に一文を寄せてゐる點から推しても、並々ならぬ關心を有してゐることを忘れてはならない。更に著者が常に客觀的立場より本書を構成さ

れたことは、「日本と中國との對比」或は「日本に於ける重商主義とヨーロッパの重商主義との比較」等々において本書に世界史的視野を附與したと同時に、二、三の問題例へば封建的貢租と新地租との比較等において、確定的回答を拒否せしめた。（一二五頁、註七四）この後者は、かゝる著者の態度によつて生じた唯一の缺點ともいひ得るであらうか。（一九四八・三・一二）

前號（昭和二十三年一・二月合併號）目次

論　說
勞働の二重性とその展開……………遊部久藏
資　料
俵ふるひ（内藤光備著）……解題　幸田成友
日本眞珠志（上）……………羽原又吉
「價値法則と社會主義社會」の問題…中山三郎
書　評
戸田愼太郎著「日本資本主義と日本農業の發展」……………島崎隆夫